

2017年度 須磨学園中学校 入学試験問題 第3回

国語 出題意図

全体について

2017年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,…」に基づき、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。また、「知識を中心とした漏れのない基礎力」に基づき、「内容・表現・心情について深く思考し表現できる応用力」をどれだけバランス良く兼備しているのかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年同様に3問構成とし、「小問集合」「説明文」「小説文」の配列とし、150点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

各問題について



問一 「調べる」という勉強における基本的習慣が身についているかどうかを試す問題である。

問二 「見る」様子を表した擬態語の知識に基づき、各語の語感を比較・検討する応用力を問うている。

問三 同音異義語の知識を、実際の具体的な状況に合わせて活用させる問題。豊富な語彙力と、知識の活用力を問うている。

問四 漢字の持つ意味の広がり理解しているかどうかを確認する問題。間接的に、普段から漢和辞典に親しんでいるかどうかを試している。

問五 敬語の理解を問うた問題。敬語を用いた例文の正否を考えさせることで、習得知識を適切に運用できているかどうかを試している。

問六 句読点を付ける問題。文の意味の切れ目を適切に把握できているかどうかを試し、間接的には読解力の有無を問うている。

□ 人間の言葉を、単に口から発せられたものとしてのみ理解するのではなく、身体と結びついた言語表現という観点から捉え直そうとする文章である。言葉を話すことが苦手だった少年時代から、踊りという身体技法を通して、徐々に自己表現の幅を広げていったダンサーである筆者の体験談が分かりやすく描かれているばかりではなく、本校の国語教育に対する考え方の本質部分に触れた、非常に示唆に富む素材文であると判断し、出題した。

出典 森山開次「言葉とともに踊る」

問一 漢字の書き取り問題。基礎的な語彙力の定着度合いを確認している。

問二 空欄にあてはまる適切な語を選択する問題。選択肢の語彙に関する知識と、話の流れに合わせて適切な言葉を選択する文脈力とを問うている。

問三 冒頭部の、少年時代の筆者について述べられた内容が適切に把握できているかどうかを確認している。指示内容を明確にするという設問要求の明確な問題とすることで、受験生の心理的負担の軽減し、内容理解を円滑にするための導入問題である。

問四 比喩表現を読み取らせる問題。比喩内容を適切に把握する上では、比喩表現を単独で理解するのではなく、前後の文脈を慎重に参照しつつ、関連内容と対応させる手つきが身についているかどうかを試している。

問五 踊りという身体表現に魅力を感じた筆者が、一体どういう過程を経て、かつては苦手だった会話表現に惹かれるようになっていったのかについて、傍線部の前後の要点を適切に把握する読解力を問うている。

問六 傍線部の比喩表現から、何気ない所作であっても、その人の性格や心理を表しているのだとする結論部の要旨を適切に把握しているかどうかを確認している。前問が、筆者が抱いた心情の理由を答える「なぜか」という問い方であったのに対し、この問題では、傍線部の帰結判断に対する根拠を中心に答えさせることを意図し、「なぜそう言えるのか」という問い方とした。

問七 「言葉」と「踊り」を主題とする文章において、素材文が、読みやすく、よどみない、まさに「踊る」ような文体になっていることに受験生が気づけるかどうかを確認している。また、対照的な性格の文体では、接続詞を多く用いた論理的な文章となるといった、文体についての基本的理解を問うている。「タイトルを参考にせよ」という付帯条件を加えることで、受験生の設問理解を補助した。

㊦ 弓の名人になるための修行を終えて故郷に帰ってからというもの、名人「紀昌」は弓を射ることもなく、挙げ句の果てには弓の使用法さえ、すっかり忘れていたという興味深い寓話である。専門家の間では未だ解釈の決着しない古典作品ではあるが、素材文では「紀昌」が弓の名人になったと仮定した上で、その道のスペシャリストとはどういう人物なのかについてのヒントを与えてくれる示唆的な内容であると判断し、出題した。言い回しが古めかしいため、語注を多く施した。

出典 中島敦「名人伝」

問一 語句の知識を問うた問題。言葉と意味との一対一の理解ではなく、その慣用句を用いた適切な例文を選ばせる問い方の工夫を施すことで、知識を活用できるかどうかを試している。

問二 空欄を補充する問題。選択肢の言葉の持つ語感を適切に理解できているかどうか、また、前後の文脈を適切に把握する論理的思考を問うている。

問三 傍線部直前の文脈を参照しながら、漢語を含む、傍線部の意図する内容が適切に把握できているかどうかを問うている。間接的には「紀昌」の人物像を受験生に意識させる問題であり、受験生が円滑に作品世界へと読み進めるための導入としてこの問題を設定した。

問四 傍線部の理由について、選択肢の表現に頼るのではなく、自分なりの考えをもって解答できているかどうかを確認している。設問理解自体は容易だと思われるが、名人「紀昌」が渡り鳥をすべて弓矢で射てしまうからだ、自分なりの答えを用意していなければ、選択肢の表現に振り回されるかもしれない。

問五 「我と彼との別」「是と非との分を知らぬ」という傍線部直前の文脈を手がかりに、傍線部の内容を推測する問題。本来、眼は眼に、耳は耳につながっているものだとする自意識とは対照的な、眼は耳に、耳は鼻のように思われるという、自意識を超えた認識が傍線部の表現に示されていることを確認するための問題である。

問六 傍線部の理由について、物語終盤の「紀昌」と「家の主人」とのやりとりの中で、名人「紀昌」が弓の知識を何ももっていないことに対して、傍線部で「家の主人」が驚愕しているという話の流れが整理して理解できているかどうかを問うている。

問七 物語全体の主旨に関わる問題。難易度を調整するため、答案において必ず使用する語を指定した。その語が本文において、どのような意味合いで用いられているのか、また語と語のつながりを適切に表現するという論理的思考を試している。